

いま経営者の「人間力」が問われています。人間力という言葉の明確な定義はありませんが、「人の心をつかんで動かす力」というものでしょう。

この人間力は、現在の企業規模に応じて、どの経営者も持っているものです。だからこそ、これまで順調に経営をして来れたわけです。創業から今日までの企業成長は、経営者の人間力の高まりに比例していることに気づかれます。経営者の人間力を高めることが、企業繁栄の基と言っても過言ではないでしょう。

逆にこの人間力が低下すると、企業は求心力を失い、社員の動きに乱れが生じて、やがて経営危機を迎えることとなります。企業の不祥事や仕事上のミスといったものは、やはり経営者の人間力と無関係ではありません。したがって経営者は、自らの人間力を高め続けることが最も大事な仕事とも言えます。それには明朗な心を保つよう、常に心がけておくことが肝要です。

九州地方で、食品会社を経営する二代目社長がいました。継承してしばらくは、父親でもある先代が築き上げた信用と勤勉な社員のお陰で、経営環境が悪化する中にもかかわらず、なんとか順調に経営を進めてきました。ところが五年が過ぎた頃から、売り上げが伸び悩み始め、やがて赤字へと転落してしまつたのです。

そんな時、誘われたセミナーで、講師から「表情が暗い」と言われたのです。そこで思わず、「経営がうまくいっていませんので」と答えると、講師は「逆ですね。社長の心の暗さが経営を悪化させています」と

## 感謝と明朗な心が 対応能力を向上させる



え・牧えみこ

断じました。さらに続けて、「経営が悪化する前、あなたの周囲で困った問題が発生していましたね」とズバリ指摘したのです。社長は「会社での問題はないですが、嫁姑の問題が最悪の状態となり、まだ尾を引いています」と告げました。すると「家庭問題はそのまま会社の問題。社長の心が暗くなると、社員は職場人としての自覚に欠け、報・連・相も上の空。社長自身の人間力も低下し、これで経営がうまくいくわけがない」と厳しく叱責されました。

そして、会社が「母親と妻との板ばさみ」からの逃避の場になっていることを突かれたのです。「母親には息子として、妻には夫として、共に感謝の態度で接する」との道を解決策として示され、さらに「両親の恩を強く自覚するとともに、奥さんには社長としての自分を支えてくれる毎日に感謝する。そうすれば、明朗な心になり、人間力が回復するだけでなく、さらにも増して会社は良い方向に向かう」と教えられました。社長はさっそく、感謝の実践に取り組み、「板ばさみ」からも逃げずに対応しました。その結果、あれほど罵り合っていた嫁姑は本当の母娘のようになり、夫婦は仲良くなり、経営も徐々に上向いていきました。

明朗な心を持つ経営者は、様々な変化に際して的確に対処できるものです。しかし、いったん暗い心になると、すぐに対応能力は低下し、危機を迎えてしまうのです。朗らかな心は、まわりを一変させ、なごめ、育て、実らせ、成就させるもの。この朗らかな心を奪うものは、怒り、憂い、悲しみ、恐れなどであることを知りましょう。